

[創立60周年]
since 1962

東京バッハ合唱団 月報

[第716号] 2022年2月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.716

February 2022

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

創立60周年記念企画“この60年を振りかえる”第2回

1962年7月1日、バッハ運動のはじめ

大村 恵美子 (主宰者) / [編集部補注]

ここからしばらく、この60年を振りかえてみます。1月新年号でお知らせしたように、だらだらとあまりご迷惑をおかけしたくありませんので、大雑把に駆け足で進めてみましょう。できたら、記念日の7月1日までに辿りついておきたいと目論んでいます。

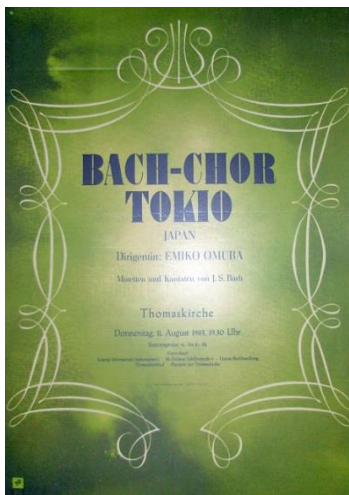
団員メンバーの顔触れもあらたまり、月報読者の世代も多く入れ替わりましたので、ところどころに注釈・説明を加えていただくこととしました。なるべく多くの方に歴史をお伝えし、体験も感動も共有していただきたいと望んでいるからです。

私たちの大好きなバッハ音楽にいたるまでに、人類の歴史が何万年か、ヨーロッパ文化の歴史に限っても千年以上が積み重なったわけですから、東洋の小さな島国に定着するまでには、今後も多くの方々の人生が必要でしょう。気の長い話ですが、駆け足で……。

1962年7月1日(日)

バッハ合唱団(*1)発足。世田谷・桜上水の森井眞氏(*2)宅。この日、20名が団員となる。バッハの約200曲のカンタータを主要対象とし、まずBWV1《あしたに輝くたえなる星よ》に、日本語訳詞でとりかかる。アップライトピアノで伴奏も加えながら、大村恵美子(*3)が合唱指導。

*1) 創立当初は、日本国中にただ一つだったので「バッハ合唱団」と名乗り、支障はありませんでした。1983年、初めての海外演奏のおり、東独(当時)ライプツィヒ市街の広告塔に、当合唱団のトーマス教会での公演を告げるポスターが貼り出されていて、そこには大きな字で“BACH-CHOR TOKIO”と書かれていました(写真)。どこのBACH-CHOR=バッハ合唱団なのか、を区別すべき最初の事態だったわけです。その後、バッハ生誕300年の1985年を迎えるにあたり、わが国にもバッハを専門に取りあげる合唱団がいくつか誕生しましたが、ここにいたって、「東京」と冠せざるを得なくなりまし



た。すなわち“東京バッハ合唱団”です。ライプツィヒ市あるいはトーマス教会が名付け親(?)。

*2) 森井眞氏は、主宰者大村恵美子の元夫、後に明治学院大学の学長を3期勤めた。創立当時は同大仏文科の教授として教壇に立ち、当合唱団のバス団員としても合唱を楽しんでおられた。現在団友。2018年9月「森井先生の白寿をお祝いする会」(アルカディア市ヶ谷)を当団が主催、直後の同年11月号月報には、団友・宮田光雄氏の新刊に触れて「宗教改革とは何だったのか、問題解明の貴重な書」をご寄稿くださった(同号に関連記事多数)。満102歳を迎えてご健在。主宰者宅とも近く、昨夏には、奥様が先生の車いすを押してご訪問くださった。

*3) 前項*2にあるとおり、旧姓は森井恵美子。

1962年10月6日(土)

信濃追分に1泊2日のリクリエーション。

合宿をともなう企画は、その後、地方公演と合宿練習なども加えて、当団の伝統になっていきます。

1962年11月10日(土)

第1回公演(*4)。弓町本郷教会。主催「オルガンとカンタータの会」、指揮：池宮英才氏(*5)。

*4) 当初、定期的にコンサートを開くという計画はなかったので、文字どおりの「第1回公演」。「第1回定期演奏会」は後述。

*5) 池宮英才氏(1924~2003)は、宗教音楽家、東京女子大学名誉教授。同大クワイヤの《メサイア》、明治学院大学グリークラブの《クリスマス・オラトリオ》などの指揮者としても長年活躍し、宗教合唱曲の普及に貢献されました。

1963年1月

辻荘一(*6)、由木康(*7)、向井潤吉(*8)、田中忠雄(*9)、服部幸三(*10)の各先生方(生年順)が発起人となって、バッハ合唱団後援会が組織された。

月報2022年2月号 CONTENTS

- ・クリオラ sing-in 終了…p.2 / ・BWV 54 (山本弘史) / 今 この地球に生きる (大村恵美子) …p.3
- ・連載：退屈するのはいそがしい [12] (大野博人) …p.4

*6) 辻莊一氏 (1895~1987) は、当時、立教大学教授。芸大楽理科でも講師をつとめられた。岩波新書に2冊のバッハ紹介書 (1955年刊『バッハ』と1982年刊『J.S. バッハ』) を書くなど、わが国へのバッハ音楽移入に貢献されました。当団の初期に「バッハゼミ」と称して、たびたびの講義をしていただきました。

*7) 由木康氏 (1896~1985年) は、当時、東中野教会牧師。「きよしこの夜」や「まぶねの中に」をはじめ、多くの讃美歌の名訳を作られ、後の世の財産になっています。筆者 (主宰者) のバッハ・カンタータ訳詞上演には、大きな期待を寄せてくださいました。教団の讃美歌委員会では、筆者の大先輩にあたります。

*8) 向井潤吉氏 (1901~1995) は洋画家。失われゆく日本各地の民家を描きつづけたことはご存じのとおり。

*9) 田中忠雄氏 (1903~1995) も洋画家。当時は、「礼拝と音楽」誌 (日本キリスト教団出版局) の編集部で筆者の同僚でした。各地の教会や施設の壁面に聖画を残しました。野尻湖・神山教会の正面祭壇にも大きな作品が掲げられています。

*10) 服部幸三氏 (1924~2009) は、当時、東京芸術大学助教授。長年、同大楽理科で後進の指導にあたりながら、ラジオ番組などでも、バッハをはじめバロック音楽の紹介に貢献された。合唱団の立ち上げに当たっては、主宰者が留学先のストラスブールから当時フライブルク滞在中の先生のもとへ、発売直後のホンダ・スーパーカブでライン河をわたって、相談に通ったそうです。【つづく】

《クリスマス・オラトリオ》を、 みんなで歌いましょう クリオラ sing-in 楽しみました。

《クリスマス・オラトリオ》の鳴り響かない年末は考えられません。いきなり、歌ってみませんか？

昨年10月、2年来持越しのカンタータ5曲とのお別れのコンサートを、12名限定の聴衆の前で開催したことは、お伝えしたとおりです (10/2、荻窪教会。月報713号に報告)。

冒頭の発案が、主宰者からあったのはその直後のこと。幸いにもコロナの感染状況が落ち着きを見せてきたこともあり、ほぼ全員が経験者という当合唱団にとっては、この企画に反対のはずがありません。このコロナ禍という逆境を、ともに乗り切りつつあるオーケストラの仲間みなさん (ARSのメンバー方) にお声を掛けたところ、一も二もなくご賛同くださり、かくして“オケ付きのクリオラ”の舞台が整いました。

この年末は、他の合唱団に所属の同好の諸氏も、さぞや歌う機会に飢えていらっしゃるはずですし、満席にならない程度に加減しつつのPRを始めたところ、



■ 本日の主役「クリオラ sing-in 合唱団」(東京バッハ合唱団員28名を含む)。いつもの練習体形と同様、右からS、A、T、Bと配置、ビジターを中心に包んで進められた。撮影位置の2階ギャラリーには、トランペット3名と「太鼓」1名も加わる (写真: 千葉光雄・団員)

ドイツ語原詞の経験者、元団員、団員のご家族、後援会員、ネットで歌う機会を探していた方、歌の好きな小学生の女の子、と、外部からの多くのビジターを含めて、歌う人と演奏者とで、合計58名の参加者が集まり、創立60周年を来年に控えてその前夜祭、さらにいろいろ多難だった年の忘年会も兼ねての、初めてのシング・インが実現したのでした。

ご参加のみなさん、ありがとうございました。これ恒例化したら? という声が、もう聞こえます。

<終了報告>

クリオラ sing-in

《クリスマス・オラトリオ》を、みんなで歌いましょう
(東京バッハ合唱団・創立60周年前夜祭/忘年会)

[日時] 12月18日 (土)、14時~16時

[会場] 日本キリスト教団・荻窪教会

- ・合唱: クリオラ sing-in 合唱団+東京バッハ合唱団
- ・管弦楽: コレギウム・アルモニオ・スペリオール・ジャパン Collegium Armonia Superiore Japan (ARS) 有志 [友情参加]
- ・オルガン: 田尻明葉
- ・指導と指揮: 大村恵美子

[プログラム]

- 合唱〈喜べや このよき日を〉 Jauchzet, frohlocket
5. コラール〈いかに迎えん〉 Wie soll ich dich empfangen
9. コラール〈いとしき み子イエス〉 Ach mein herzliebtes Jesulein
21. 合唱〈栄えあれ み神に〉 Ehre sei Gott
23. コラール〈み使いとともに〉 Wir singen dir in deinem Heer
35. コラール〈よろこべ み神は〉 Seid froh dieweil
24. 合唱〈あまつ君よ 聞きたまえ〉 Herrscher des Himmels

[主催] 東京バッハ合唱団

[協力] 日本キリスト教団・荻窪教会

- ・「クリオラ sing-in 合唱団」: 一般9、後援会員5、元団員6 (計19名、うち元団員で後援会員の方を含む)
- ・東京バッハ合唱団: S6、A8、T7、B7 (計28名)
- ・ARSメンバー: F1、Ob2、Tp3、Vn、Va、VC (計9名、他に太鼓は団員)
- ・指揮者+Org 合計58名

《抗(あらが)え いざ罪に》BWV 54

山本 弘史 (後援会員、山形県在住)

この題名は「罪と戦え」という言葉で覚えていた。ある時、バッハのカンタータにあったなと思い付き、歌詞を確かめたいとネットで検索すると、東京バッハ合唱団 2005 年 6 月の月報がでてきて、歌詞を確かめることができた。橋本眞行氏による解説は大変詳しくとてもためになった。バッハの残した 4 曲のアルトソロのためのカンタータの 1 曲であること、レームスの自由詩によるものであること、バッハが 30 歳の時の作品であることなどを知ることができた。

第 1 曲 (アリア) は、ピアノ独奏の編曲もネットで聞ける。穏やかな曲という印象である。しかし、歌詞は違う。

抗(あらが)え いざ罪に 毒は なれを襲わん
サタンに 惑わされ
み栄(さか)え 汚すものは 死の呪い 受けん
(訳詞・大村恵美子)

アルトという、人間の通常の音域に近い身近な声がかたごとと訴える。弦はヴィオラが複数の声部という、やはり人の声を強調した作り、リズムの刻みは「うながし」に聞こえる。聖書朗読箇所、説教箇所は 1 週間前に決まっているのだろうか。すぐにふさわしい詩が手に入る環境にあったのだろうか。大変すぐれたシステムの構築があったことになる。

カンタータは、歌詞の理解なしに深い理解に至らない。少なくとも対訳が必要である。そして、カンタータ自体が説教である。そして、この解説文も説教理解の助けとなる。

「罪と戦え」は聖書にはない言葉である。しかし、この言葉を私は大事にしていきたいと思う。世の中は、私利私欲が横行しているが、少しでもこのカンタータの内容が伝わると良いと思う。レームスは詩で説教をした。バッハは音楽でそれを深めた。解説でも伝わることもある。

そして、東京バッハ合唱団は、日本語で直接それを伝える。団員は説教者になっているのである。音楽を楽しむという次元を超えた役割を、東京バッハ合唱団は果たしていると思うのである。

今 この地球に生きる

大村 恵美子 (主宰者)

新年早々の 1 月 9 日未明ごろに、私は、新規に改訂された「国歌」を歌って歩いている人々の夢を見ました。「きーみーがー代ーはー」という悠長な現行の日本国歌を排して、元気な歌ではあって、しかも“偉い”“立派”、“強い”などの、褒めるに値する特徴のない平凡人のための歌なのです。病んでいる人、小さい人

<次回公演予告>

第 121 回定期演奏会 (創立 60 周年記念公演 I)

[日時] 2022 年 5 月 14 日 (土)

[会場] 杉並公会堂大ホール (東京・荻窪)

[曲目] J.S. バッハ作曲 (日本語上演・大村恵美子訳詞)

カンタータ第 21 番《われは憂いに沈みぬ》BWV 21

カンタータ第 1 番《あしたに輝く たえなる星よ》BWV 1

カンタータ第 147 番《心と日々のわざもて》BWV 147

[演奏]

・独唱: 光野孝子 (S)、谷地畝晶子 (A)

鏡 貴之 (T)、山本悠尋 (B)

・管弦楽: COLLEGIUM ARMONIA SUPERIORE JAPAN
(コレギウム・アルモニア・スペリオレ・ジャパン、略称 ARS)

・オルガン: 室田千晶 (団員)

・合唱: 東京バッハ合唱団

・指揮: 大村恵美子

※チケット情報その他の詳細は、近日中にお伝えします。

(こどもばかりでなく)、悩み多い人、そんな、負の特徴を帯びている人々も、住民なので、それらもちゃんと含んで、この地球に生まれてよかった、たのしい、という歌、そんな内容でした。

そこで、その夢の中で聞こえた歌の歌詞と旋律を、目ざめてすぐに書きつけてみました。でも、それを「今この地球に生きる」というタイトルにはして見たものの、このまま「国歌」として公表しようものなら、激しい反対にあって、何かされるかもしれない……などの思いもよがり、ごくごく身近な人たちに、私の思いの詰まっている歌詞を、そっと見せるだけで済ますことにしました。全然さまにならないでいる現状の歌詞ですが、議論がおこってくれるのが最上です。

また夢の中の、それに合わせた旋律 (スペースがないので、興味のある方には郵送します) にも、どんどん手を加えてもらえるような同士を見つけたいと思っています。果たしてどうなることか?

- 1) 今 この地球に生きる われら
苦も楽も共に担って 自由に羽ばたこう
幼ない子 老いた親 みな日々を待ち望もう
夜は明けて 新しい朝が現れる
- 2) 森のけものたちも 町に住む小犬も
われらのいとし仲間なのだ
それぞれに生きている
空飛ぶ鳥も 川の魚も 地球を楽しむ仲間たち
地にあるを喜び みんなで苦しみは分かち合おう

基本的に賛成して、歌詞にも旋律にも手を加えてみようと思う方が出てきてくださったら、私は飛び上がってお礼をいうことでしょう。[7]

都会と田舎

安曇野閑人 大野 博人

年明け、新聞社の後輩が安曇野を訪ねてきた。

「もうそろそろ東京に戻りたいって感じてませんか？」

一時帰国中のベテラン海外特派員。外国の大都市に住み、そこを足場に各国をいそがしく飛び回るのが仕事だ。同じようなことをしていた私が、日本での田舎暮らしに耐えられるはずがない、と思っただらしい。

「おあいにくさま。首都圏への未練なんてさらさらない」。そう言っても、まだ不審のまなざしである。

彼が生まれてから高校卒業まで暮らしたのは中国地方の山間の小さな集落。家は兼業農家で、近所に商店もほとんどない。路線バスは1時間に1本ほど。

その記憶が、彼にとっての田舎暮らしのイメージの原形だ。何もなくて退屈な田舎町から、何でもあってエキサイティングな都会や外国に飛び出したのに、何を好きこのんで……。

そんな考えの持ち主である。私は私で、こっちの暮らしぶりを見せて、彼の田舎暮らしへの「偏見」をただしてやろう、と対抗意識をむき出しにした。

都会派と田舎派の対決だ。

私は安曇野がいかに快適か、思いつく限りの理由をしゃべりまくった。

—— 土地が安い。庭先の雑木林なんか銀座の一等地の1万分の1だ。(絶対値上がりしないけど)

—— 野菜は自分で作るし、知り合いとも交換する。アマチュア・オーケストラの仲間からはパプリカもオクラの種ももらった。合宿には、先生が自分の畑のジャガイモやタマネギを持ってきた。

—— 道路はほとんど渋滞しない。電車なんて1時間に1本でも余裕で座れる。

—— コロナにも負けないぞ。三密の場所なんてほとんどないし。

それでも、彼は洗練された文化やグルメはないでしょう、などと反論する。

—— いやいや、コンサートも演劇も隣の松本で水準の高い公演がよくある。都会に住んでたって、美術館やホールにしょっちゅう行くわけではないだろう。だいたい混み合った電車で出かけるのは疲れるし。

—— おいしくて安いイタリアンやフレンチだって近所にたくさんあるぞ。森の中には本格的なフランス風の惣菜店もパン屋もある。

私が力説しても、なかなか納得しない。

思うに、彼に限らず都会派は、きっと世の中の「端っこ」にいるのがいやなのだ。首都圏にいれば、経済や文化、情報の「真ん中」にいる気分がする。

「端っこ」と「真ん中」で思い出すのは『わが盲想』



■ 拙宅の近くの丘からながめる雪の北アルプス
(写真提供と説明も筆者)

という本だ。著者のモハメド・オマル・アブディンさんはスーダン人。若くして全盲になったため母国の大学での勉強をやめ、鍼灸を学びに日本に留学することにした。その決意を告げると、お父さんが「なんでわざわざ地球の端っこまで」行くのか、と難色を示した。それへのアブディンさんの反論が明快だ。

「地球には端っこなんてありません。地球は丸いから」

そのとおりだ。東京やニューヨークが真ん中で、安曇野が端っこなんておかしい。ちなみにアブディンさんは、あまりにも勉強ができたので、あっという間に日本語も習得、さらに日本の大学院で学び、国際政治学者になっちゃった人である(取材で会ったことがあるけれど、日本語をまるで母国語のように話すのにびっくり)。国際政治学者がいうのだから、地球に端っこがないのはまちがいない。

たしかに首都圏の人口は3500万くらい。安曇野は10万弱。でも、人口が多いところに文化が花開く、というほど話は単純ではない。バツハが活躍していた18世紀のライプツィヒの人口は数万人くらいだったそうだ。

後輩が帰る日、隣の丘の上の公園に連れて行った。そこからは雪におおわれた北アルプスの山々の連なりと雪化粧をした安曇野が一望できる。だれもが写真に撮ったり、絵に描いてみたりしたくなるみごとな風景だ。

でも訪れている人は数人。広い駐車場もがら空き。

「これが東京近郊にあったら、毎週末観光客でごった返すような絶景ポイントだろう」という私に、彼は「たしかに……」と同意した。

そのあと、松本市で開店したばかりのガレットとクレープのレストランでランチ。彼は出てきた料理に「フランスでも出せるレベルだ」とスマホを取り出して写真を撮った。

私はほくそ笑んだ。田舎派の勝ちだな……。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)